

## 7. 清水川の復元

島原市の安中地区では、火山噴火によって水源が2度にわたって失われた。

1792年寛政の噴火の眉山崩壊時に中木場地区の川や井戸等の水源がすべて失われ、当時の人々は、清水川碑文<sup>1)</sup>にあるように、苦闘しながら水源を探し当てた(図-1)。1821年から170年間に渡って自然流下式の清水川の水路が中木場地区の生活を支えた。昭和44年に中木場簡易水道が整備されると、水道用水としては使用されなくなったが、地元では大切に保存されてきた。源流の北上木場町の岩上山の麓には岩下神社が、途中の天神元町の天満宮には水神が祭られ、約4,500mの最下流の天下町に鳥居と水権現が祭られている(写真-1, 2, 3)。

当時の庄屋は夢枕に立った神様のお告げにより水源を探し当てたといわれており、庄屋は夢枕に立った神様を、太宰府天満宮の神様と確信して、その分けみ霊をいただいて、現在の天神元町の地に、天満宮水観現としてお祀りしたのが天満宮のはじめといわれている。当時の人の水を求めた執念と清水川を引き大切にしてきたかが伝わってくる。

平成の噴火によって、中木場簡易水道と清水川が火砕流堆積物に埋まり、再び水源が奪われた。島原市北上木場町にあった岩下神社も碑文ごと埋没した。

中木場簡易水道は、警戒区域解除後に別の水源から通水して、地区の水需要を満たしている。水源が埋没した清水川の水路は残ったが、水源が近くにならないために枯れたままになった。杉谷地区から眉山の西側を通して安中地区を結ぶ、まゆ山ロードの計画により、この道路盛土によって清水川の水路が埋まることになった。この埋没する部分の水路は、清水川災害遺構として平成町に移設保存されている(写真-4)。埋没した清水川碑文は、天満宮の境内に平成17年9月に再建されて、この間の経過を伝えている(写真-5、図-2)。清水川の水路はまゆ山ロード



写真-1 天神元町の天満宮  
平成23年10月  
高橋和雄 撮影



写真-2 天満宮の水神と水路  
平成23年10月  
高橋和雄 撮影



写真-3 天下町の鳥居と水権現  
平成23年6月  
高橋和雄 撮影

の部分を除けば、ほぼ当時のまま残されている。

砂防指定地の有効活用を目指した水無川上流砂防指定地利活用ワーキンググループで、清水川の復元が取り上げられた。復元を求める地元の強い声を受けたものである。平成 23 年 8 月 3 日には地元住民らと雲仙復興事務所による現地踏査がなされた。研究代表者も現地を踏査したが水路は草に埋もれているが、水路そのものの埋没箇所はない(写真-6)。清水川を管理していた中木場清水川管理組合は現在でも存続しており、水が常に流れるようになれば管理できるとしている。問題は水源であるが、常時流れるようにするためには電気代等の維持費がかからない水源を使用する必要がある。ボーリングをして水源を上流に探すか、雨水をためる池を上流に作る方法等が検討されている状況である。また、まゆ山ロードの場所をどのように水を通すかも課題である。今のところ、以前の湧水地点周辺で水源は見つかっていない。



写真-4 まゆ山ロードの建設に伴って移設された清水川の水路  
平成 24 年 3 月  
高橋和雄 撮影



写真-5 天満宮の清水川碑文  
平成 23 年 10 月  
高橋和雄 撮影



写真-6 草むらに埋もれた清水川水路  
平成 23 年 10 月  
高橋和雄 撮影

幾世代この中木場に住みついた人々の命を守り生活を支えた泉がここにある。  
寛政四年（二七九二年）四月一日の島原地変は多くの人命財産といのちの水をも奪い去った。  
時の庄屋下田吉兵衛は荒廢と混乱のなか敢然として起ちあがり村人と図り失われた水を求めて率先  
垂範六年の歳月と労力を費やして村中十八箇所を堀り続けたが遂に一滴の水も得られなかった。  
その間の辛苦は筆舌に尽くせぬものがあつたであらう。  
右手の森に祭祠する岩下神社の由来紀には「寛政四年大地震ノ為当村ニ有ル所ノ出水悉ク渴止ス村民  
慨嘆ニ絶ヘズ 然ルニ文政年間旧領主松平侯大ニ是ヲ憐ミ論シテ曰ク曩ニ肥後ノ国ニ斯ク水ノ乏シ  
キ村アリ村民難苦ノ余リ拳ツテ太宰府ニ祈リテ出水ヲ得タリト  
依テ時ノ庄屋下田吉兵衛ハ村民惣代三名ヲ率イテ太宰府ニ至リ祈ルコト十七日夜其靈驗有リテ村ノ  
上部ニ峙立セル岩上山ノ溪間ヨリ一水湧出漸次水勢ヲ増ス 時ニ文政四年（一八二一年）ナリ ソノ水  
ヲ引テ村ノ最下ニ達セシム 其ノ流域一里三合ナリ 村民始メテ安堵ス 依テ当社ヲ創造スルニ当  
リ村惣代ノ一人トシテ庄屋ニ從ヒ太宰府ニ至レル谷口善八ハ喜ビノ余リ 自己所有ノ山林ヲ寄進シ  
テ其ノ敷地トナセリ」とある。  
人びとはこの天啓の泉に驚喜し神を祀り年ごとに岩下神社の川祭りをあげてここに住む喜びと祈り  
を継承してきた。爾来百五十年絶えることなくこれが源流となつて産土は潤い歴史と生活をはぐみ  
ながら今日に至つた。開通当初は木をくり抜いた樋を用いたが腐食が甚だしいため安政五年（一八五  
八年）現在の切石造りに替えられた。川巾一尺五寸深さ七寸川底は漆喰とした。当時としては高度の  
工法であつた。この寸法を碑受けの原寸としたのも往時の形状と創設の労苦を偲ぶよすがとするため  
である。  
時移り人かわり時代の進運とともに水道化の声も昭和の初期頃から台頭したものの或るときは熟し  
又あるときは低迷し起伏に富んだ推移のなかで地域の人は不便に耐えながらもこの水路に依存して  
来た。時あたかも明治百年（昭和四十三年）の意義あるとき天の時地の利人の和を得て地域のよりあ  
がる熱意のもと島原市事業として着工、総工費二千三百万円配管延べ12,000米をもって翌四十  
四年完成した。  
積年の宿願成就を記念し併せて下田吉衛門ほか先達の偉業を永久に顕彰するためこの碑をここに建  
立する。

図-1 岩下神社にあった清水川の碑文<sup>11)</sup>

## 清水川

幾世代この中木場に住みついた人々の命を守り生活を支えた泉の一部がここにある。

寛政四年（一七九二年）四月一日の眉山大崩壊は多くの人命財産と共に命の水をも奪い去った。

時の庄屋下田吉兵衛は村人と計り六年の歳月と労力を費やして村中十八箇所を堀りつづけたが遂に一滴の水も得られなかった。その間の辛苦は筆舌に尽くせぬものがあつたであろう。

その後、岩上山の溪間の湧水を探し出しこの水を延々四五〇〇米（下は大下町水権現）余りも引いて村民の生活用水として利用してきた。

噴火災害で埋没した北上木場町岩下神社の由緒紀には「寛政四年大地震ノ為当村ニ有ル所ノ出水悉ク渴止ス村民慨嘆ニ絶エズ 然ルニ文政年間旧領主松平侯大ニ是ヲ憐ミ論シテ曰ク曩ニ肥後ノ国ニ悉ク水ノ乏シキ村アリ村民難苦ノ余リ拳ツテ太宰府ニ祈リテ出水ヲ得タリト、依テ時ノ庄屋下田吉兵衛ハ村民惣代三名ヲ率イテ太宰府ニ至リ祈ルコト十七日夜其靈験有テ村ノ上部ニ峙立セル岩上山ノ溪間ヨリ一水湧出漸次勢ヲ増ス 時ニ文政四年（一八二一年）四月ナリ ソノ水ヲ引テ村ノ最下ニ達セシム 其ノ流域一里三合ナリ村民始メテ安堵ス 依テ当社ヲ創造スルニ当リ村惣代ノ一人トシテ庄屋ニ從ヒ太宰府ニ至レル谷口善八ハ喜ビノ余リ 自己所有ノ山林ヲ寄進シテ其ノ敷地トセリ」とある。

人びとはこの天啓の泉に驚喜し神を祀り年ごとに岩下神社の川祭りを行ってここに住む喜びと祈りを継承してきた。

開通当初は木をくり抜いた樋を用いたが腐食が甚だしいため安政五年（一八五八年）切石・漆喰を利用して作り替えた。当時においては程度の高い工法であつたと言う。開通以来約百七十年間、絶えることなく当地を潤したが、平成二年（一九九〇年）十一月十七日雲仙普賢岳が一九八年振りに噴火、翌年六月三日の大火砕流は多くの尊い生命や財産、そしてこの清水川の清流をも奪った。

噴火が終わった今、清水川は湧水点を含む上流が土石流により埋没したが、その一部は北上木場に残っている。まゆ山ロードで分断された部分は、清水川遺構として平成町に移設保存され、往時の面影を伝えている。

噴火災害により機能をなくした清水川であるが、下田吉兵衛他先達の偉業を永久に顕彰し、後世に伝えるためこの碑をここに建立する。

平成十七年九月吉日

図-2 天満宮の清水川碑文